

保育者・教員養成課程における発声指導の必要性

—発声テキストの研究と作成—

内田恵美子・大川晶也

(東海学院大学短期大学部, 南山国際高等学校中学校)

要 約

保育園や幼稚園（以後保育現場とする）で毎日のおこなわれている音楽活動では、保育者は幼児達の前で率先して大きな声で歌い、さらには幼児達のお手本になるような歌唱技術があることが望まれる。また、様々な保育活動のために幼児達に対して声かけをおこない、時には大きな声を出して喋らなくてはならない。保育者養成課程（以後養成校）においての発声法指導ではお手本となるような歌唱技術と、また、毎日の保育活動で喉の負担が軽減するような発声法を指導できることが理想である。

本研究では保育現場での声や歌唱の現状を把握するために、現役の保育者に調査をおこない、その上で「話す」「歌う」このどちらにも適した独自の発声法テキストを研究し作成した。

今回は作成した発声テキストを東海学院大学短期大学部幼児教育学科「ミュージカル」の授業で学生に使用して発声指導をおこない、養成校での発声指導のあり方を考察した。

キーワード： 発声法 発声テキスト アンケート ミュージカル

1 はじめに

保育園や幼稚園（以後保育現場とする）では保育者が幼児に向き合い常に声かけを行い、幼児達に伝わるよう声を出さなくてはならない。また、幼稚園教育要領指針「表現」¹⁾において、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」とあるように保育活動において音楽はなくてはならないものである。また、幼児が様々な歌を聴くことができ、演奏して楽しめるような環境を設けることが必要であると記載されている。「環境」²⁾では、「自然に触れて生活し、その美しさ等に気付く」「季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く」「身近な動植物に親しみを持って接し、生命の尊さに気付く、大切にすること」もあり、多くの園では季節や行事、動物や植物の歌が多く取り入れられており、また、朝の会の歌に始まり、昼食やおやつ等の歌等、保育生活の中にたくさんの歌が演奏され生活の大事な一部になっている。保育者自身が幼児にとって最も身近なお手本であり、その音楽をも左右する存在であるし、幼児達から見れば、保育者の歌を聴いて一緒に歌うことで、幼児は想像を巡らし、表現する楽しさを味わうことができるのである。そのために保育者は歌

唱に対して自信を持てる技術が必要である。もちろん保育者養成課程（以後養成課程）の学生はプロの演奏家を目指しているのではなく、あくまでも保育の現場で生かせる発声法の取得を目的とするものである。

前述したように保育者は常に幼児達に伝わるよう話し、歌い、そしてそれは幼児の登園から帰園まで長時間に渡り、喉への負担は相当であると想像できるが、実際現場の保育者はどのように感じているのか。そこで今回筆者は現役の保育者にアンケートを実施し、声に関する現状や歌唱に対する取り組みを調べることにした。アンケートの結果を分析し、現状把握と問題点を見出し、養成校での発声指導のあり方についての考察をした。

また、筆者が担当する授業の中でも、「話す」「歌う」ことを重要とする「ミュージカル」の授業において、幼児達によく声が届くように話し、歌が歌える、この「話す」「歌う」どちらにも偏らない発声法であることを念頭に研究した上で、今回独自の発声テキストを作成した。また、今回作成した発声テキストは、この先教員養成校で使用することを視野に入れ作成したものである。

2 研究の目的と方法

(1) 「アンケート」

対象は筆者が直接調査を依頼した岐阜県内の幼稚園 5 園 68 名の保育者である。2016 年 1 月に調査依頼をし、2016 年 3 月に解答を受け取った。アンケートでは、日々の保育活動での声を出すことや歌う事についての意識調査を行い、養成課程での発声指導法の思案材料とした。調査は無記名とし、すべての項目に答えなくてもよいこととした。調査項目は以下の①～⑨である。

- ① 保育者は声をよく使うと感じるかどうか。
- ② 自分の声が子供達によく届いていると感じるか。
- ③ よく届くように声を出すことで喉に負担を感じることもあるか。
- ④ 子どもたちに歌を歌わせているか。
- ⑤ ④ではどのように歌わせているか。
- ⑥ 子どもたちに聞かせる自分の歌に自信があるか。
- ⑦ 大学（専門学校）で発声法の授業やレッスンはあったか。
- ⑧ 実際に受けた指導に関して当てはまるものは何か。
- ⑨ 歌唱や弾き歌いの指導について感じたことは何か。

(2) 発声テキストの作成

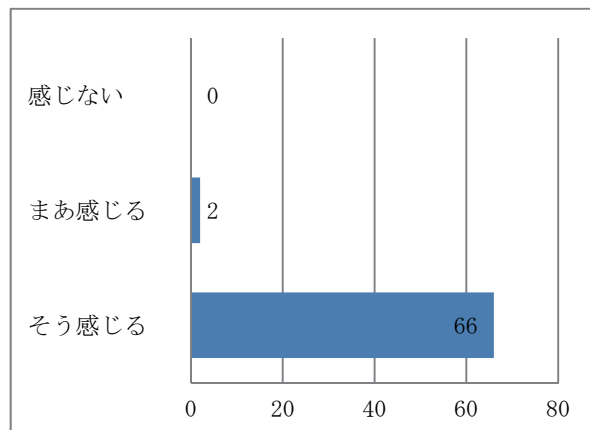
本校では音楽のカリキュラムとして「幼児音楽ⅠⅡ」「ソルフェージュ」「子ども音楽」「リトミック」「ミュージカル」とあるが、最も本課題に適している「ミュージカル」の授業において発声指導をおこなうこととした。ミュージカルは「演劇」「音楽」「ダンス」の三要素からなるものであり、「演劇」では台詞、「音楽」では歌唱において声を使わなければならない、技術的には台詞、歌唱共によく通る声でさらに活舌良いことが求められる。また、長時間声を出し続けなければならない、ミュージカルにおいて発声は最も重要であるといえる。

前述したように保育者は幼児達に伝わるよう話し、歌わなければならない、また、喉への負担も大きい。養成課程では「話す」「歌う」為の発声法と、喉の負担を軽減させる正しい発声法を指導が必要だと考える。そこで今回は、ミュージカル受講の学生に指導するために、「話す」「歌う」このどちらにも偏らない発声法のテキストを作成し、保育者として必要な発声の指導法を考察した。

3 アンケート

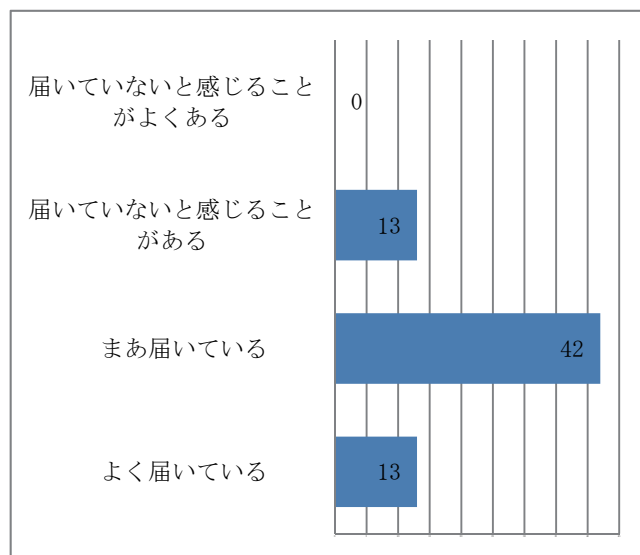
(1) アンケートの結果

①保育の現場で声をよく使うとを感じるか。表 1

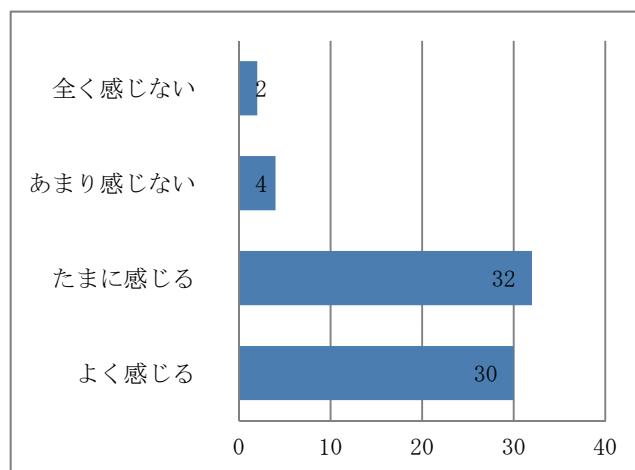


②自分の声が子ども達によく届いていると感じるか。

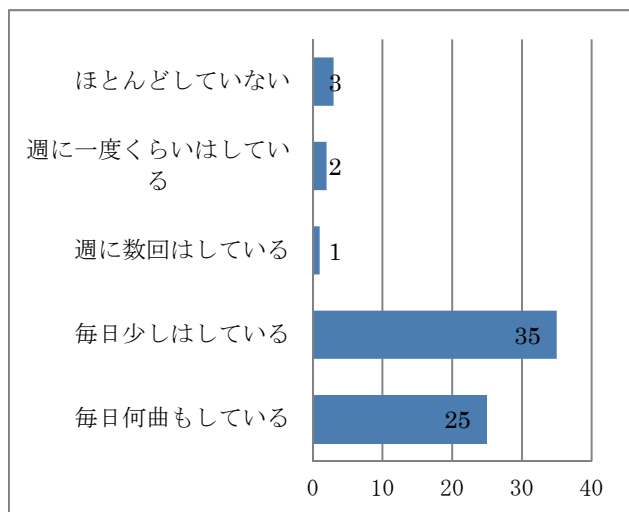
表 2



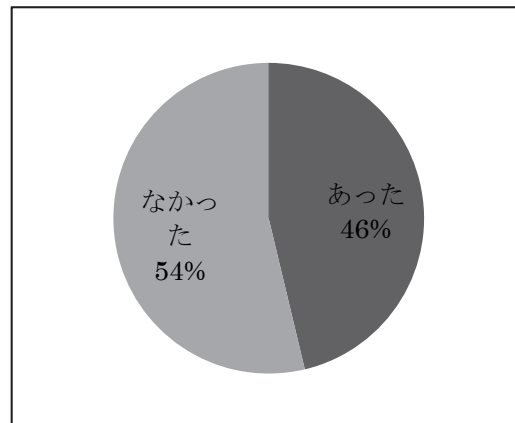
③よく届くように声を出すことで喉に負担を感じることもあるか。表 3



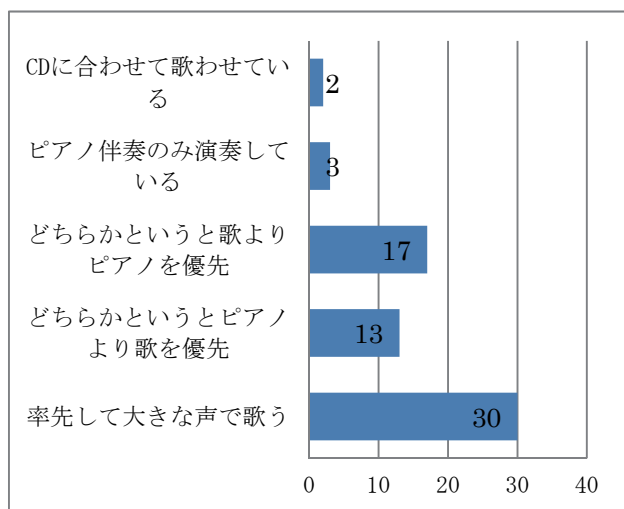
④子ども達に歌を歌わせているか。表4



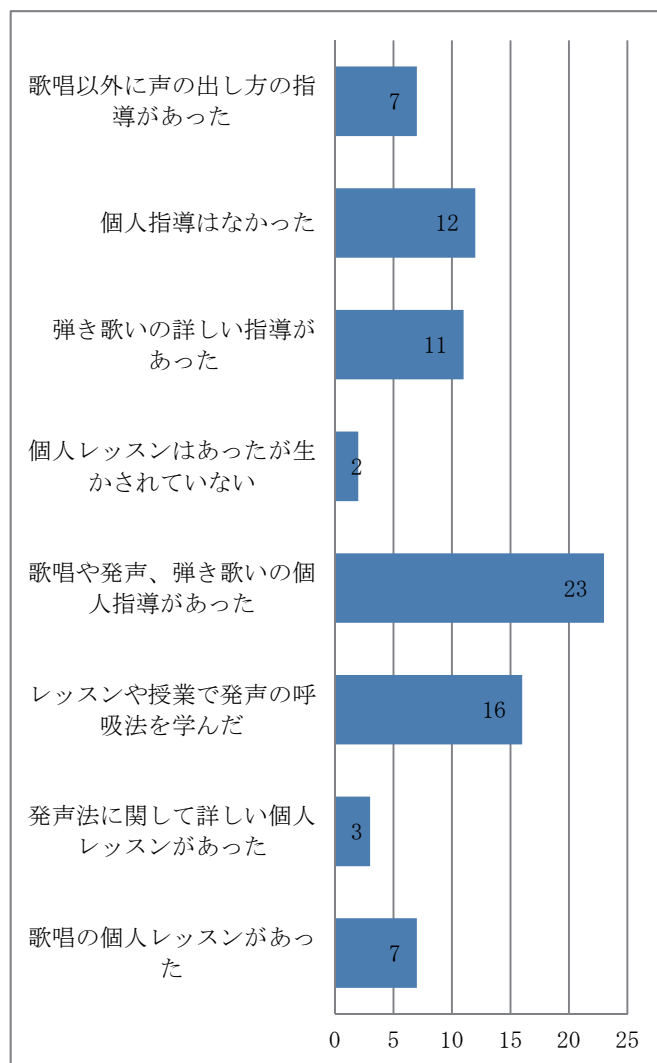
⑦大学（専門学校）で発声法の授業やレッスンはあったか。表7



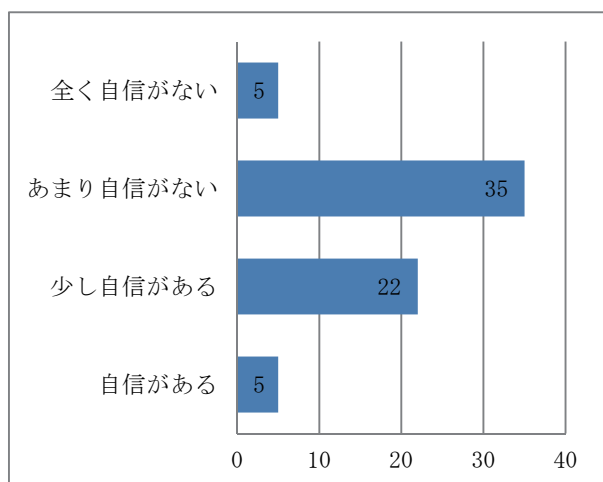
⑤ ④で1～4を選んだ場合、どのように歌わせているか。表5



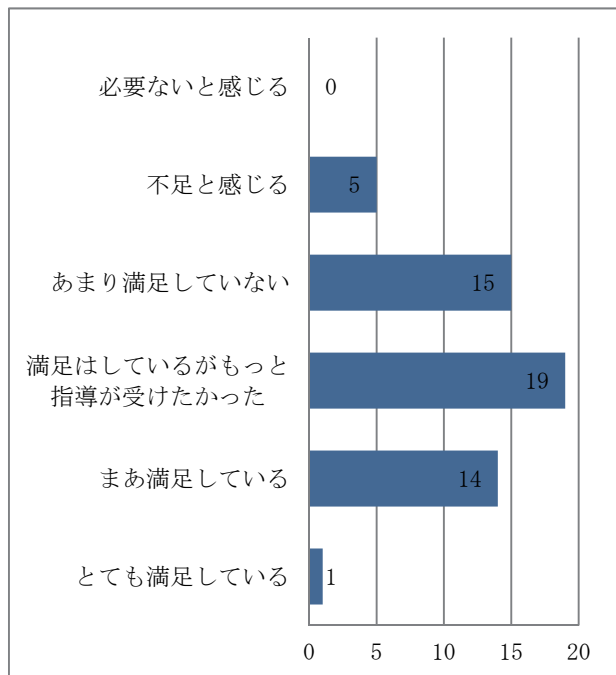
⑧養成校での歌唱指導について。表8



⑥子ども達に聞かせる自分の歌に自信があるか。表6



⑨歌唱や弾き歌いの指導について感じていることについて。表9



(2) アンケートの考察

今回アンケートの回答した 68 名すべてが声をよく使うと感じると答えており、毎日の保育活動では声を使わなければならない環境だといえる。約 8 割の保育者は、子ども達に自分の声が届いていると感じている。しかし 13 名の約 2 割の保育者は届いていないことがあると感じており、そのことによって幼児達に伝える為より大きく声を出そうとしていると予想できる。「よく届くように声を出すことで喉に負担を感じることもあるか」という質問には、やはり 62 名の約 9 割の保育者が喉に負担があると感じているのがわかる。

ほとんどの保育者が子ども達に歌唱活動をおこなっており、前述したように保育現場では毎日歌の活動がおこなわれているのがわかる。その中でも、率先して大きな声で歌うようにしている保育者が 5 割近くおり、どちらかという歌を優先させて歌っている保育者を合わせると、7 割近くの保育者が大きく声を出して幼児達に聞かせている。しかし、保育者全体の半数以上の保育者が自分の歌に自信がないと答えており、声をしっかり出して歌っていると答えた 7 割の保育者の中にも、自信はないが率先して歌っている状況であることがわかる。

養成校での歌唱指導状況の調査では約半数に近い 31 名の保育者が養成校において個人指導はもとより授業で

の発声指導もなかったと答えている。個人指導があった保育者は 36 名であったが、個人指導に満足したと答えた保育者は 3 割にも満たない。7 割近くの保育者がもっと歌唱指導を受けたかったと答えている。

これらのアンケート結果を見てみると、養成校での正しい発声法を身に付けることで、幼児達に自信を持ってより美しい歌唱ができるようになり、また声かけによる喉への負担を最小限にするという発声法の指導というものが、改めて養成校には必要であると考えられる。

4. 発声テキスト

(1) 発声の目標と現状

発声とは、人間の肺に吸った息を喉の奥にある声帯から出す事によって声帯が振動する事を指す。この振動によって起きた小さな音が、喉、口、鼻などの共鳴腔群に共鳴して声生まれる。発声を学び発声法を修得する事によって歌唱はもちろんのこと、演劇における台詞や演説、日常生活における発音に声枯れする事なく、豊かな声色を保つ事が出来る。人間の咽頭にある声帯という筋肉はわずか男性 17~21mm、女性 12~17mm前後³⁾の繊細なものである。風邪をひいたり声を出し過ぎるとすぐに声枯れがおこる。

発声法の目標の一つは保育者・中等教育養成課程の学生(以後追従者とする)の歌唱能力の向上と、追従者の経験と研究から導き出した独自の発声法の構築、それによる赴任校における学生への指導を考察、研究に繋がりその教育を受けた学生が感動する歌が歌えるようになる事である。また追従者が、声枯れせず声がかっきり声が明瞭に届くように話ができて、喉にも負担がかかりにくい喋りを指すと考える。言葉を発する事と歌声とは密接な関係にあり、保育・初等教育現場では情緒が発達途上段階である幼児、児童には歌唱の際に話し声と歌声との区別をせずに発声し「どなり声」で歌う現象もみられる。細田淳子 蟹江春香(2009 p35)⁴⁾

一般的な教員がよく口にする言葉が「もっと口をあけて!」「しっかりと声を出して」であろうが、闇雲に口を大きく開けていての発声は効果的ではなくむしろ逆効果で、共鳴腔に響かず喉に力が入って出る喉声(咽頭原音に近いもの)になりかねない。声を闇雲に出す事も、発声法を勉強する最初の言葉としては適切かもしれないが、その言葉から美しい響きや、発声法を追求する方向に発展させる必要があると考える。

しかし今日、追従者を経て晴れて教育現場に赴任した

教員の全てが歌唱法を生徒に十分に指導出来るほどの能力を有しているとは言えず、歌唱指導に明確な基準がない事から、今後音楽指導のある保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校において、生徒一人一人への歌唱法の指導を試行錯誤し、研究の出来る教員の人材育成が必要であると考え。佐々木直樹 玉野佑佳 竹内美咲 伊東薫 (2015 p1) ⁵⁾ は発声指導の考察には冒頭の要旨に「音楽を指導する際に発声指導が重要であることは、音楽科教師にとって周知の事実でありながら、指導内容を構築することの難しさや様々な発声状況への対応の難しさから、十分に行われていないのが現状である」とある。

よってここに筆者のこれまでの発声研究、赴任校における生徒への指導経験、合唱団や個人レッスンの歌唱指導の経験から、発声法の事項を「姿勢、腹式呼吸、男性女性双方に活用が期待される発声練習法」に分け、その指導方法を考察した。

また、作成した発声法テキストは、保育者養成校のみならず、今後教員養成課程での発声指導テキストで使用できることを視野に入れ研究、作成した。

(2) 姿勢

スポーツや舞踊、読書に至るまでさまざまな分野で正しい姿勢の重要性を説かれる。歌唱は体が楽器であるため、男性女性共通の事項と言える姿勢は発声においても重要で正しい姿勢の確保が後に論じる腹式呼吸の修得に良い影響を生み出し、良い発声に繋がるといっても過言ではない。身体のどこかに不必要な力が入っていると、声が硬くなったり、呼吸が浅くなったり、音量音程の不安定に繋がる。美しい姿勢を維持する事により腹部や横隔膜に張りが保たれ安定した発声法を維持できる。

(テキスト1) (テキスト1図)

(3) 口の開け方(喉の開口) あくびを通して

発声法の修得に必要なものの一つに口を開ける(開口)がある。言葉を構成している母音と子音を綺麗に発声するにはこの開口における形が大事であると考え。喉の開け方と連動するが口を開けると同時に口の中の軟口蓋が空いているかを確認する。(その為に指を2本口の中に縦に入れて軟口蓋が動くのを体で感じる) 軟口蓋の動きを自身で確認する他の方法としてあくびである。あくびは息を吸う動作、息を貯めてため息を吐く動作である。ため息を高い声で長くすることが、喉を開いて綺麗な声を出す訓練になる。また、あくびにより、喉の奥の筋肉

が伸びたり縮まる為、自然にそこが柔らかくなり、丈夫になる。人が息を大きく吸い込むと、口の奥の喉の入り口にある軟口蓋がぐっと押し上がる。口腔蓋もそれに引っ張られて上に引き込まれる。そうすると口腔および鼻腔に大きな空間ができ、鼻腔共鳴が含まれた豊かで響きのある音色が含まれた声になる。それだけではなく声帯の振動を頭蓋骨に当てやすくなり、高音も綺麗になりより綺麗な音色が生まれるのである。(テキスト2) (テキスト2図)

(4) 腹式呼吸(呼吸法)

西洋音楽に留まらず声を使う全ての音楽分野でこの呼吸法は重要な事項の1つである。一般に歌唱時の呼吸は腹式呼吸が良いとされているが、対比される胸式呼吸は、腹式呼吸と共に息の出入り口は鼻、口からであるが、その息の溜まり場はもちろん肺である。具体的な違いは肺のどの部分を押し狭めて息を出すかということである。

腹式呼吸は肺の下部にある横隔膜を下に押し下げて肺を広げるが、これはこの横隔膜を使って呼吸をコントロールし、長く力強く息を吐くことができる為である。これにより普段の呼吸における息の入りにくい肺の奥まで息を吸い込む事が出来る様になる。歌唱に余裕を持って力強く歌うには、十分な空気を肺にためて、安定した呼吸を声帯に送り続け声帯の働きに繋げることである。息を吸い込む為に肺を広げるのが横隔膜であるのに対し、胸式呼吸の場合は胸の前部、側部の拡張のみで息をため込む。よって横隔膜が使われない。佐々木正利(1993 p147) ⁶⁾ は胸式呼吸が歌唱法に適さない理由として次の4つの理由をあげている。

- ①胸郭保持の原理が保たれないこと。
- ②肋骨に囲まれている為、ブレスの自在性が確保されないこと
- ③支えの意識がどうしても浅くなること
- ④音声学的な問題ではあるが、上胸部が圧迫されるために起こる声帯閉鎖筋の弛緩状態である。

また藤本いく代(2013 p7) ³⁾ は初心者への発声指導法の問題の一つとして以下のように述べている

「初心者の場合、息を吸うことを重視する傾向にあるが、これが間違いをもたらす。」肺の空気は、なくなれば戻るといふ身体機能に任せれば自然体で行うことができる呼吸も、逆の思考で考え始めた場合は、能動的に空気を吸い込むことになり、身体に不自然な力み加わってしまう。円滑な発声は、身体機能に即した呼吸によってのみ

可能となるのである。」とある。

このことから、発声指導上「意識しすぎる呼吸」は呼吸の際に力みが生じ易く、逆効果になってしまう事がわかる。筆者の経験上「自然な呼吸」の境地は歌唱の際に喉に負担が無く、声帯や咽頭に力みのある発声をした時よりも感覚も薄い。感覚が薄い技法を理解、会得する事は容易な事ではない。発声法も含め、呼吸法を確立していない追随者はしばらくの間歌唱練習、呼吸の訓練を怠ると感覚、筋力共に衰えてしまう。習得の為に長い時間を要するし近道もない。日頃からの訓練が大切といえる。

声楽教育現場で頻繁に使用され、上記でも述べている「支え」とは、指導者により教えの説き方は様々である。中国の気功における呼吸法になぞられた支えの指導⁷⁾、側腹の筋力の重要性を説いた呼吸⁸⁾など十人十色である。

筆者のこれまでの経験によると、支えの解釈は空気を吐く際に無駄な息がたくさん出ていかないために（息漏れ声にならないように）息を体の中にとどめておこうと作用する現象の事を指すと考えている。

息を吸う時に丹田（臍の下）に息を入れる様な感覚（横隔膜を押し下げる）を感じつつ、息を吐いている 間胸部側へ上がってくる横隔膜（下腹部の緊張感）を再びお押し下げる様に緊張感を維持していく。この状態で、次項で論ずる共鳴腔を意識した声を出す流れのある声（イタリア語で *la voce sul fiato*、息の上の声という意味）でこの声が発声法における理想の声と考えている。特に歌唱における高音部の際にこの支えが不十分でない人の多くが、声がつまったり、音程が不安定になり喉へ負担が来る事から、「支え」は発声指導の際の重要な項目であると考えられる。

またスピーチや演説、舞台における台詞を話す事にもこの支えは必要不可欠であり、声の震え、言葉の詰まり（吃音）、発声に使う筋肉（スピーチ・マッスル）の硬直や痙攣が直接声帯及びスピーチ、舞台上での台詞の発声における声の震えに影響する。（テキスト3）（テキスト3図）

（5）男性、女性における母音の発声と練習法（指導と訓練から）

追随者への発声法指導の前に追随者自身が自分の声の特性、声種を理解することが必要であると考えられる。男性と女性とでは発声法の根本に相違があるのはもちろんの事、発声指導者は追随者の声、声帯に無理のない発声練習の実施を通して声種を最低でも4つ（ソプラノ、アル

ト、テノール、バス）の内のどれかに振り分けなければならない。

それぞれの声種には高音域を得意とする声種（ソプラノ、テノール）と中音域低音域を得意とする声種（アルト、バス）とあり、それぞれの長所にあった音域が生かせる指導を提示しなければ逆効果となり、声帯を傷つけかねない。太めで長い声帯は低い声に向いているが、短めで細い声帯は高い声に向いているのと考えられる。指導によっては太めの声帯でもそれを伸ばす事（高音域を歌う訓練）によって音域を伸ばす事は可能である。しかし短い声帯の場合は長い声帯によって得られる中低音域の歌唱法は向いていない。それらを学生の声の音色からの材の声種を提示し、指導する事が発声指導者の務めであると考えられる。

男性と女性における発声の根本的な違いに地声と裏声（仮声帯）がある。男性では歌唱の根本は地声で仮声帯は使用しない。ただし高音域を出す感覚を体感する為に仮声帯発声から実声（地声）に戻す訓練や、男性で高音域を主とする声種、カウンターテノールは仮声帯を使う。女性の場合は低音域と中音域の間から地声から仮声帯を混ぜ、高音域は仮声帯を主とした発声に繋げていく。

今日人間が耳から聞き分けられる声の音色は実声、仮声帯発声を通して、気管や咽頭、鼻腔、服鼻腔などの空洞の中の共鳴腔群を経て言葉、響きのある声へと変化している。個々の身体、骨格の違いからそれぞれの共鳴腔群の形や大きさに相違があり、声、音色の相違につながっていく。鼻腔共鳴の利用は発生時における声から響きがある声に変わる重要な事柄であると同時に声帯への負担を減らし、声をより大きく、響かせる重要な作業である。

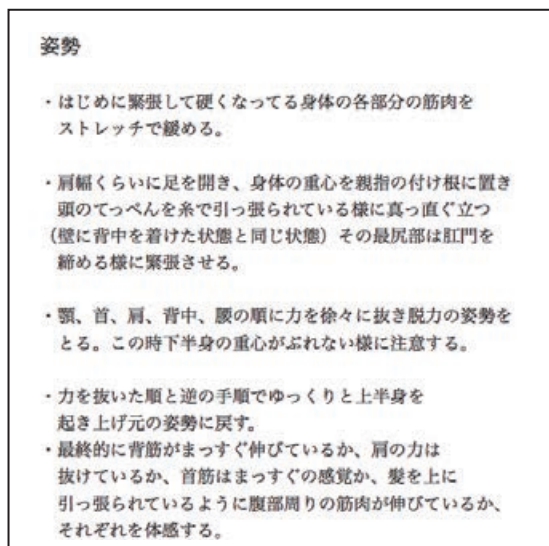
男性女性関わらず鼻腔共鳴を意識し、声に意図的に混ぜつつ高音域を無理なく澄んだ美しい音色を目指し、安定した声の響きを常に維持する事が望ましい。しかし論じるにあたり、これから追随者が訓練を实践した事による感覚と、論じた内容の全てが必ずしも合致するとは限らない。上記に記した通り、性別、個々の身体、骨格の違い、声帯の太さ、細さなどから考えられる声の性質や癖、生まれつき会得出来ている技能を考慮すると、最終的な発声法の修得は自分自身の修練と随時声を聞いて評価、判断が的確に出来る指導者との研究を通して追随者自らの発声法を見出し、繰り返し訓練して覚える事によって発声法の修得と論じる事が出来る。

筆者の経験から発声法の研究に際し効果のある実践方

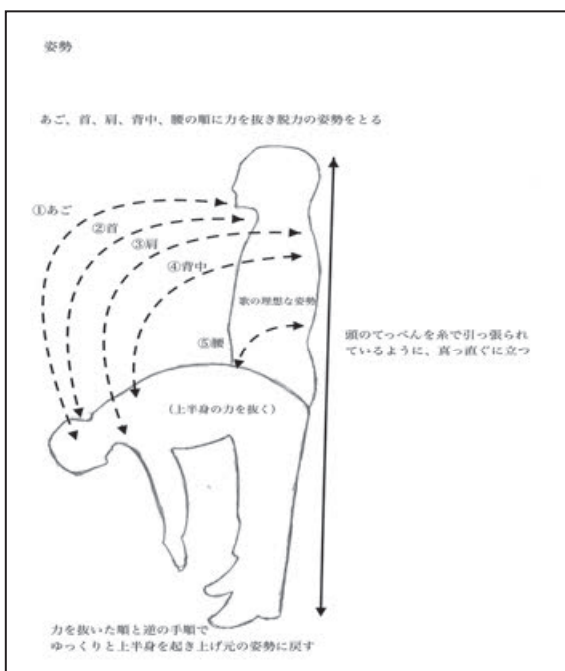
法に感覚的な表現に頼らざるを得ない。何故なら発声法のコントロールは呼吸以外の大半は発声に必要な咽頭、言葉を司る口腔、響きを司る共鳴腔群などの頭部周辺に集中しており、尚且つこれまでに論じた腹式呼吸、姿勢、口の開け方よりも頭部周辺は人間が手足の様に自由自在に全ての筋肉をコントロールする事ができないからである。

感覚的な表現”眉間からチューンガムの様に声が出る様に””息の五線紙の上に音符が乗っかる様に歌う””頭頂部がミンミン響く感覚を感じる”などの感覚的な表現が今日までに歌唱の指導で指導者と追随者との間で交わされているのである。(テキスト4)(テキスト4図)(テキスト4楽譜)

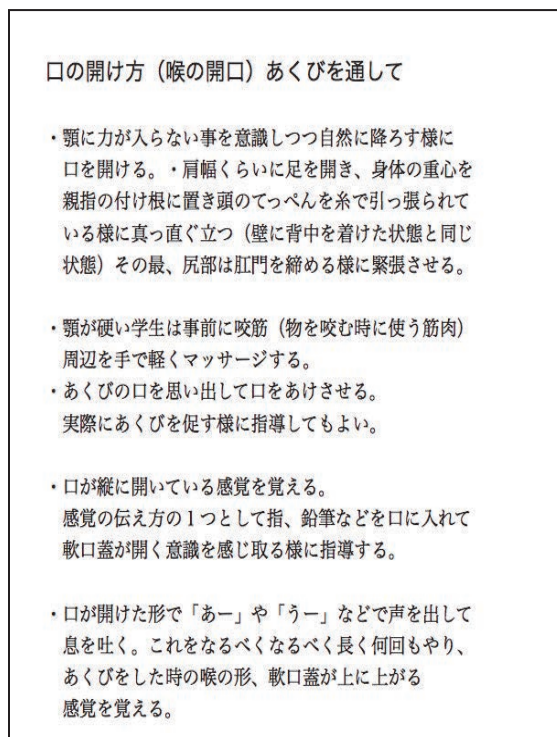
(テキスト1)



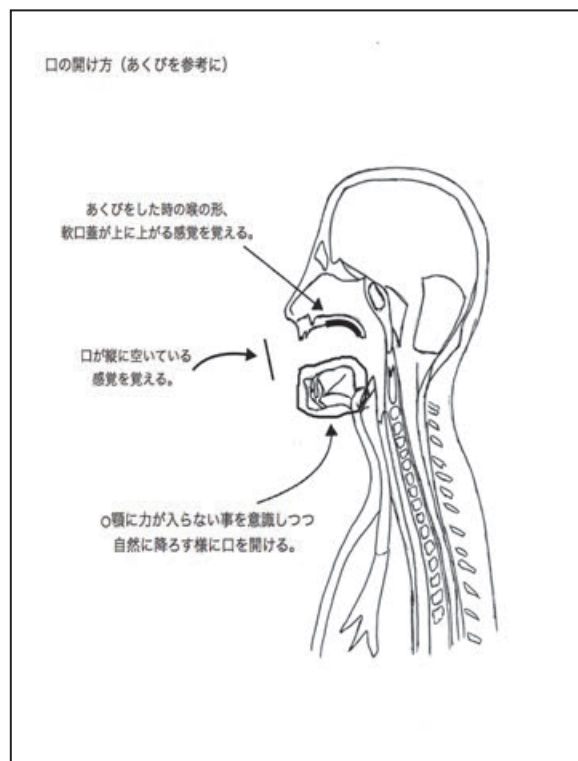
(テキスト1 図)



(テキスト2)



(テキスト2 図)

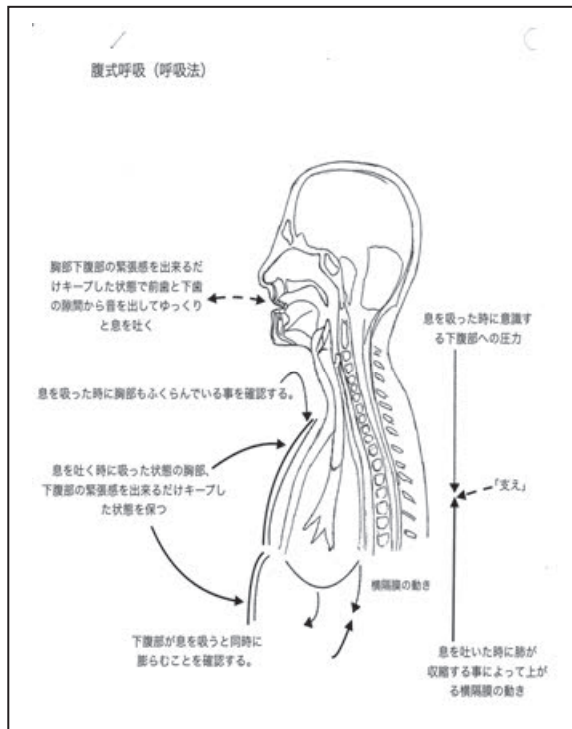


(テキスト3)

腹式呼吸 (呼吸法)

- ・「姿勢」で述べた行程を維持しながら左右の手を胸部と下腹部に当て、下腹部が息を吸うと同時に膨らむことを確認する。
- ・下腹部の意識が確認が出来なければ、睡眠時寝た状態で同様のメソッドを実施させる様に促す。
- ・最初に息を吐く時に腹筋を使ってぎゅーとお腹をへこませて全部吐く。そしてその反動で鼻から一気に吸う。おへその周りから下腹までを膨らませて横隔膜を下げるようにする。息を吐く時に吸った状態の胸部下腹部の緊張感を出来るだけキープした状態で前歯と下歯の隙間から音を出してゆっくりと吐く。吐いている間も胸部、下腹部の緊張感は維持する。
- ・息を吐く時に全て息を吐き出してから息を吸うように心がける。また息を吐く時に胸郭の形を保持する事。
- ・喉を開いて声を出す訓練としてあくびを出した時出来るだけ高い声で息を吐く。その時に女性は頭の旋毛から声を出すイメージ、男性は眉間から頭頂部にかけて声が出るイメージで声を出す。なるべく高いところから始め「ふうううう」と息を吐ききるまで息を吐く。
- ・息を吸う時に下腹部に息を入れる様な感覚(横隔膜を押し下げる)を感じつつ、息を吐いた時上がってくる横隔膜を吐きながら押し下げる感覚を感じ取る。

(テキスト3 図)



(テキスト4 図)

(テキスト4)

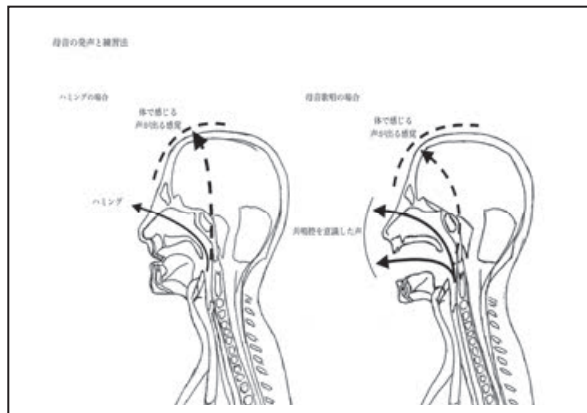
男性女性共通の母音の発声と練習法 (指導と訓練から)

発声

- ・口を閉じて声を出す。ハミングで声を出し、頭蓋骨に響かせる意識を保つ事で鼻腔への響きを体感する。
- ・口を開けて口腔発声と同じ意識のままハミングをする。
- ・ハミングの感覚がある程度掴んだら、ハミングの響きを保ちながら声にする。鼻声にならないように鼻腔と口腔にバランス良く響かせる。眉間から頭頂部まで声が出ている意識をしっかりと保つ

練習法

- ・全てのトレーニングを音(調性)を上向きさせていき、低音域から高音域まで実施する。
- ・1番は1拍目と2拍目の高音域を同一母音で支えを意識しながら無理なく声を出す
- ・2番は最高音域への移行に併せて狭い口から開けた口へと口の形を変えつつ、均一の響きを維持しながら声を出す
- ・3番は「Aあ」の口から唇を尖らせる様に「Oお」を作り、均一の響きを維持しながら声を出す



(テキスト4 楽譜)

母音の発声と練習法 (練習法)

低い音から高い音に移行する時短らかに上がるように意識すること

共同腔の響きと支えを落とさないように意識する

それぞれの母音を分けて4拍目をかけて歌うように音程を意識し過ぎずレコーダーを使って

共同腔の響きと支えを落とさないように意識する

aからoへ口を尖らせる様にaとoで響きの場所が変わらない意識を保って

全てのトレーニングを音(調性)を上向きさせていき、低音域から高音域まで実施する。

- 1番は高音域を同一音で支えを意識しながら無理なく声を出す為のトレーニング
- 2番は高音域への移行に併せて1拍目から2拍目へ口の形を変えつつ、均一の響きを維持しながら声を出すトレーニング
- 3番目は同じ1拍目でも口の形を変えて、均一の響きを維持しながら声を出すトレーニング

5. 考察と今後の指導

前項のテキストを使用し、本校で「ミュージカル」受講生に発声指導をおこなっている。今年度はまだ4回の講義で使用したのみであるが、毎講義終了後におこなっているリフレクションシートには学生からはこれまでに次のような意見があった。

学生1

- ・ 詳しい歌う方法があることに驚いた
- ・ 高い声が少し出やすくなった気がする

学生2

- ・ 発声法を気を付けて歌っていると、恥ずかしさが少しなくなる気がする

学生3

- ・ 話す発声はできるが、歌の発声は難しい

学生4

- ・ こんなにいろいろ気を付けていると歌が歌えない

今年度の受講生は小中学校や高等学校で歌唱指導（合唱指導）をあまり受けておらず、歌唱としての発声法を学ぶのは初めてであったため、発声知識が新鮮であったと推測される。

学生1は歌唱に対し詳しい発声法があることを知らなかった。もともと歌うことが得意の方であったが、今回作成したテキストによる発声法を試したことで、これまでより高音が出やすくなったと答えている。学生1は高音が出ることに對して喜びを感じており、高音の出し方を学ぶことに満足感があった。満足感を得る事でより学ぶ意欲が高まり、技術の向上が予想される。また、指導者はその限界を決めるのではなく、学生の可能性を十分に伸ばしていけるよう指導しなければならない。

学生2はこれまでの弾き歌いの授業等で、人前で歌う事に羞恥心があったが、発声を注意しながら歌う事で恥ずかしいと感じにくくなったと答えている。発声知識が少し身についたことで以前より自信を持って歌えるようになったと推測される。

学生3は演劇の経験があり、台詞のための発声法の知識があったが、歌唱としての発声法はそれよりも難しいと感じていた。台詞は日常生活における喋ることの延長で、舞台から客席に聞こえるよういつもより大きく喋ることであるが、歌う事は第4項で述べたようにいくつかの注意すべきことがあるため、難しいと感じていたと推

測される。

学生4は指導されたことに注意していると歌唱ができなくなると答えているが、学生3と同様であろう。

今回作成した発声法テキストには、専門的な用語や言い回しがあるため、初めて発声を学ぶ学生にとっては簡単ではない。指導は指導者の技量に委ねられるため、発声知識がある指導者であれば指導しながら必要に応じた説明や実践ができるが、そうでない指導者の場合テキストがただの読み物になる可能性がある。教える側にも相応の技量が必要であろう。

今後、今回作成したテキストを使用して発声法を指導しながら、テキスト内容改訂の必要性を検討し、保育者に必要な発声法指導をさらに研究していく必要がある。

引用・参考文献

- 1) 幼稚園教育要領解説(2008)文部科学省 2章第2節
- 2) 幼稚園教育要領解説(2008)文部科学省 2章第2節
- 3) 藤本いく代(2013) 教員養成課程における初心者への発声指導の試み-発声器官開発を主眼として
-宮崎大学教育文化学部紀要 芸術・保健体育・家政・技術 第28号 (2013) p4, p7
- 4) 細田淳子 蟹江春香 (2009) 保育者養成教育における発声法 東京家政大学研究紀要 第50集(1) p35
- 5) 佐々木直樹 玉野佑佳 竹内美咲 伊東薫 (2009) 教員養成課程における発声指導の考察-理論と発声器官に着目して-臨床総合研究 14 2015 研究 p1
- 6) 佐々木正利(1993) 教育養成大学における発声指導の基本理念と方法-呼吸法と声帯振動の理論を背景とした実践への提言-岩手大学教育学部研究年報 第53巻第1号 p146~147
- 7) 東学(1993) 歌唱における呼吸法及び発声法について
-茨城大学教育学部紀要 人文・社会科学・技術(1993) p99
- 8) 三原重行(1978) 声楽発声関す二・三の考察
-島根大学教育学部紀要 人文・社会科学 (1978) p21

保育者・教員養成課程における発声指導の必要性

Consideration of the Necessity of Vocalism Training
in the Nursery Teacher Training Courses
—Research for and Development of the Textbook—

UCHIDA, Emiko · OKAWA, Shoya